ヘクサプラ断片の残存率について

―― ヘクサプラ研究 1 ――

伊藤利行

本稿は、ギリシア語旧約聖書本文に関するオリゲネスOrigenes (ca. 185-253/4) の偉大な業績であるヘクサプラ（六部共観 τὰ ἑξαπλά, τὸ ἑξαπλοῦν, τὸ ἑξαστίχιον）の断片が、現行マソラ本文と比較対照した場合、どの程度存在しているのかを統計的に示そうとするものである。このような統計を提示しようとする理由は、ヘクサプラ断片がどの程度残存しているかについて統計的に報告している文献は、筆者の知る限りでは、皆無と言えるからであり、又、この統計が筆者の今後のヘクサプラ研究の土台ともなると考えたからである。統計に先立ち、ヘクサプラが断片として今日に伝わったその経緯を概観する。[1]

一、ヘクサプラの成立

ヘクサプラとは、次の六つの部分をそれぞれ欄として配置し、相互に比較対照し得るように編集された旧約聖書のことである。その六つの部分とは、(1)ヘブライ文字で書かれたヘブライ語旧約聖書本文、(2)ギリシア文字に置き換えられたヘブライ語旧約聖書本文、それに次の四種類のギリシア語訳本文、(3)アキュラス訳（Ἀκύλας, Aquilas. 以下 α′ と略記）、(4)シュンマコス訳（Σύμμαχος, Symmachus. 以下 σ′ と略記）、(5)オリゲネス校訂になるセプトゥアギンタ（七十人訳）本文（以下 ο′ と略記）、(6)テオドティオン訳（Θεοδοτίων, Theodotion. 以下 θ′ と略記）である。聖書のある部分では、訳者名不詳の次の三つの翻訳も、可能な限り加えられている。即ち、(7)第五訳（Quinta. 以下 ε′ と略記）、(8)第六訳（Sexta. 以下 ς′ と略記）、(9)第七訳（Septima. 以下 ζ′ と略記）である。

そしてオリゲネスは第五欄の ο′ に第一欄のヘブライ語本文との異同を示すアリスタルコスの記号を加えた。[2]

この大事業が完成までに要した年月については諸説あるが少なくとも十年は必要としたであろうと考えられている。[3]

二、ヘクサプラの伝承

A　失われたヘクサプラ完本

この三世紀中頃に完成されたヘクサプラという書物は、大変に浩瀚（カン）なものであっただけに、全体が完全な形で筆写される事は極めて稀であったと考えられる。しかし、その存在は、まずエウセビオス Eusebius (ca. 263-339) により、[4] 次にヒエロニムス Hieronymus (ca. 347-419/20) により、[5] 更に六世紀になってもカイサレイアの図書館が無事に存在していた事を示す傍証[6]によって確認される。けれども、その後このヘクサプラ原本の存

在を確認する資料はなく、いつの間にか原本は失われてしまった。その経緯は全く不明である。ただカイサレイアがイスラム軍の勢力下に入った紀元六三八年に彼らの破壊の犠牲となったのではないかという推測がなされるのみである。

しかし、この事と関連して北メソポタミアのテラの主教パウルス Paulus episcopus Tellae が紀元六一六年から六一七年にかけてアレクサンドリア近郊のアントニオス修道院で為し遂げたと写本の奥付から判断される重要な翻訳シロ・ヘクサプラ Syrohexapla について言及せねばならない。このシロ・ヘクサプラとは $\mathfrak{o}'$ 本文を正確に逐語的にシリア語に翻訳したもので、アリスタルコスの記号を省略せずに付加し、欄外には数多くの α''、σ''、θ'' 等 $\mathfrak{o}'$ 以外の訳の読み方をも付加しており、ヘクサプラそのものかそれに近いものからの翻訳であると考えられている。このシロ・ヘクサプラの底本とカイサレイアにあったヘクサプラ原本との関係がどのようなものであったとしても、アレクサンドリアも六四二年にはイスラム軍の勢力下に入るわけであるから、七世紀前半にはヘクサプラ完本は失われたという最終的推論に我々は到達するのである。

B　ヘクサプラ断片の伝承形態

そこでヘクサプラは、断片として、次の三つの形態によって今に伝承されることになった。

Ⅰ　ヘクサプラの一部分（抜粋）

a　欄形（ヘクサプラの元来の形）……(ア)

b　非欄形

1　本文($\mathfrak{o}'$)のみのもの（アリスタルコスの記号の有るものとそうでないものとがある）……(イ)

2　本文($\mathfrak{o}'$あるいは$\mathfrak{o}'$以外の系統のもの)に……(ウ)

欄外注（ヘクサプラ系の読み方である場合もそうでない場合もある）のあるもの

Ⅱ　教父文献

a　教父の聖書注解や講解等の中に……(エ)

b　カテナ（聖書の順序に従って関連する教父の著作を鎖 Catena のように結びつけ編集した中世時代の産物）……(オ)

Ⅲ　ヘクサプラに基づく翻訳……(カ)

次にそれぞれについてやや詳しく見てみると、まず(ア)に属するものの中で最古のものは十九世紀末にカイロのエズラ・シナゴーグのゲニザ（物置き）から発見された重記写本 2005(Cambridge Univ. Libr. Taylor-Schechter 12. 182 七世紀）で、詩篇21(M22)篇20～24節のヘクサプラ全六欄が書き留められていた。[7] しかし、一八九六年にミラノのアンブロシウス図書館で、年代は少し新しいが、より重要な重記写本 1098 (Mailan, Am-

brosian Libr. gr. O.39 sup. 十世紀、発見者 Giovanni Mercati によれば九～十世紀）が発見された。これには、第一欄は存在しないが他の五欄に詩篇の部分が総計一四二節分書き記されていた。[8] これら十九世紀末の発見以前には、欄形のものは、わずかにホセア書11章1節の第二欄から第六欄が、写本 86 (Rome, Vat. Barberianus gr. 549 九～十世紀）によって伝えられているにすぎなかった。

(イ) o' の本文は、ヘクサプラの他の部分よりも良く伝承されている。これに属する代表的な写本は、写本 G Codex Colbertо-Sarravianus (Leiden, Univ. Libr. Voss. gr. Q. 8; Paris, Bibl. Nat. cod. gr. 17; St. Petersburg, Imperial Libr. v. 5 四～五世紀）で、アリスタルコスの記号を伝えている。

(ウ) これに属する代表的なものには、次のようなものがある。写本 M Codex Coislinianus (Paris, Bibl. Nat. Coisl. gr. 1 七世紀）、写本 Q Codex Marchalianus (Rome, Vat. gr. 2125 六世紀）、写本 86（前述）、写本 710 (Sinai, St. Cath. gr. 5 十世紀）等。これに属するものは、聖書の各書において、本文の系統と欄外注の関係が異なることがあるので注意を要する。[9]

(エ) 教父文献の中でヘクサプラ伝承にとって重要なのは、ギリシア教父では、エウセビオス、モプスエスティアのテオドロス Theodorus Mopsvestenus (ca. 352-428)、ヨアンネス・クリュソストモス、Joannes Chrysostomus (†407)、キュロスのテオドレトス Theodoretus Cyrrhensis (ca. 393-ca. 466) ら、ラテン教父では、ヒエロニムスやアンブロシウス Ambrosius (†397) らの著作である。しかし、これら教父の著作中のヘクサプラ引用は、常に正確であるというわけではなく、原文より悪くなっている場合が多い。即ち、言葉通りの引用ではなく意味に従った引用であったり、言葉通りでは一致しない諸訳（例えば、$\alpha'\cdot\sigma'\cdot\theta'$）を、やはり恐らくは意味に従って、どれか一つに統一して、それを α' σ' θ' と表示して、α' も σ' も θ' も文字通りに一致していると読者が判断する他ないようにしたり、各訳の名称を明示せずに（ある場合には、ἄλλος, ἄλλοι, ἕτερος, ἕτεροι などと表示して）引用したりするのである。

(オ) ヘクサプラの読み方を伝承していた教父の著作は、現在我々が知っているよりも遙かに多かったに違いないが、大部分は失われたようである。しかし、一部は、カテナの中に入れられ伝えられた。種々のカテナの中には、その他では伝わっていない教父の注解等の断片が含まれていたり、欄外注にヘクサプラからの引用が伝承されていたりする場合がある。例えば、写本 264 (Rome, Vat. Ottobonianus gr. 398) の欄外には詩篇24 (M 25)～32 (M 33) のヘクサプラ断片が、写本 1173 (Rome, Vat. gr. 752) の欄外には詩篇77 (M 78)～82 (M 83) のヘクサプラ断片

が伝承されている。[10] だが教父の著作について言えたことが、カテナについてもあてはまる。特にカテナはその資料が複雑なだけに、後代のものになると、その本文悪化も著しい。読み方の短縮・変更、訳者名の混同・置き変え・削除（無視）、より一般的なセプトゥアギンタ本文（ルキアノス系）への同化傾向、そして一般的な筆写上の誤り等がある。それゆえ、カテナの証言には十分な注意が必要である。

(ii) これに属する代表的なものは、シロ・ヘクサプラとヒエロニムスによる詩篇のο部分のラテン訳 Psalterium Gallicanum であろう。

三、ヘクサプラ断片の集成

A　Field 版以前

以上のようにして伝承されたヘクサプラ断片の集成が最初に行われたのは、有名なセプトゥアギンタの Sixtina版（一五八七年）の注においてであって、Petrus Morinus によってなされたものである。翌年、Sixtina 版のラテン訳が出た時、Flaminius Nobilius は Morinus の注に更に注を加えてラテン語に翻訳した。次に現われたのが、ヘクサプラ断片への注と各訳への緒論を持つ Joannes Drusius の著作[11]で、彼の死後一六二二年に出版された。その後、一七〇九年に Lambertus Bos が出版した著作[12]中にもヘクサプラ断片が集められているが、名実ともに最初のヘクサプラ断片の集成版と呼べるのは、一七一三年にパリで出版された Bernard de Montfaucon の二巻本 Origenis Hexaplorum quae supersunt, multis partibus auctiora quam a Flaminio Nobilio et Joanne Drusio edita fuerint である。

B　Field 版

その後もヘクサプラ断片集が幾つか出版されたが、現在もなお一応はヘクサプラ断片の集成版と言えるのは、Frederick Field の版である。この版は、post Flaminium Nobilium, Drusium, et Montefalconium, adhibita etiam Versione Syro-Hexaplari, concinnavit, emendavit, et multis partibus auxit Fridericus Field という表題への説明句が示すように彼の先達の業績を踏まえて主に当時入手出来たあらゆる刊本に基づいて編集されたもので、彼自ら写本の校合をして出来上った部分は少ない。そこで彼が用いた資料が誤っていれば、その誤りをそのまま伝える可能性があるわけであるが、Field は機械的に編集したわけではなく、その慧眼によって注の中で度々伝承の誤りを指摘し是正している。とはいえ、ヘクサプラへの九三頁に亘るすぐれたプロレゴメナと一八四二頁の本文、補遺七七頁を持ち、総計二千頁を越えるこの大冊は、又、その本文中で何度もシロ・ヘクサプラからのギリシア語本文の再構成を試みており、その点でも、それまでのヘクサプラ研究の総括と言えるも

のである。これ以後今日に至るまでヘクサプラ断片全体に亙る新しい集成版は、なお現われてはいない。

C　Field 版の評価

では、この Field 版は今日どのように評価できるだろうか。それは当然 Field 版以後の新しい資料の発見と Field 版が基礎としていた古い資料の見直しという二つの面からなされねばならない。もちろん両者は互に関連し合っているわけであるが、ここでは一応(ア)新しいヘクサプラ断片の発見、(イ)旧資料の見直し、(ウ)Field 版の評価の順に見ることにする。

(ア)　これも代表的なものを伝承形態に従って整理すると、まずIa として前述の写本 2005 と 1098 の発見があげられる。特に後者の発見はヘクサプラ研究に新時代をもたらした。写本 1098の発見は、マソラ本文に対するクムラン写本の、セプトゥアギンタ本文に対する十二預言書の皮革写本の発見[13]に匹敵するものである。なぜなら、この写本の発見前には、ヘクサプラの外観についての我々の知識はエウセビオス、ヒエロニムス、それにエピファニオス Epiphanius Constantiensis (ca. 315-403)[14]らの証言による外なかったが、この発見によって実に千数百年ぶりにヘクサプラの外観が直接我々に知られるようになったからである。又、この発見によって内容的にもヘクサプラ各欄[15]についての我々の情報量は増加したが、とりわけ Field 版では稀に見られるだけであった第二欄のそれは著しく、二つの方面に問題を提起するに至った。一つは現行マソラ本文の発音より少なくとも五〇〇年以前の時代の発音がどのようであったかというヘブライ語史上の問題であり、もう一つは、このようなギリシア文字表記のヘブライ語本文の存在の持つ諸問題（その成立の時・所・目的等）への問である。[16] この写本の発見に関連して、ヘクサプラ伝承によらないεの発見を取り上げてよいであろう。その主なものは、前述のカイロのエズラ・シナゴーグのゲニザで同様に発見された列王紀[17]と詩篇[18]の断片である。[19]

Ib としては写本 710（前述）の欄外に発見されたイザヤ書1～16章のヘクサプラ断片があげられる。これは L. Lütkemann-A. Rahlfs, Hexaplarische Randnoten zu Isaias 1-16 aus einer Sinai-Handschrift (MSU I/6), 1915 として公刊された。この見事な研究には、ヘブライ語—ギリシア語、ギリシア語—ヘブライ語索引が付されているが、これ以前には、このようなヘクサプラ断片についての索引は存在しなかった。Hatch-Redpath の Concordance には、確かに Field 版の個所が引用なしで示されている。しかし、ヘブライ語との対応は示されておらず、その意味で、この研究は重要で、後にはAquila-Index 作成時の模範となった。

IIa としては、写本49 (Florence, Bibl. Laurentiana, Plut.

XI 4 十一世紀）の欄外から一九三〇年に、エウセビオスのイザヤ書注解がほとんど完全な形で発見されたことが、また、IIbとしては、前述の写本 1173 の刊行（一九七五年）があげられる。[20]

Ⅲに属するものとしては、幾らかのシロ・ヘクサプラ断片の発見があげられる。[21]

(イ) 新しい資料の発見と並行して、既知の資料の見直しも進んでいた。それは既に Hatch-Redpath の Concordance(1897) の addenda et corrigenda で始まっていたが、本格的なものは、大ゲッティンゲン版編纂の基礎作業としての写本校合と共に始まる。特にイザヤ書の編纂が始まると、セプトゥアギンタ委員会は、大量に残存するこの書のヘクサプラ断片の理解なくしては、この書のセプトゥアギンタの十分な理解もありえないと考え、ヘクサプラ資料欄の新設と今後の巻でもそれを続ける事を決定する。[22] こうして必要な写本校合が為されゲッティンゲン版の刊行が続くと共に Field 版の欠陥が明らかになって来た。即ち、訳名伝承の誤り、校合の誤り、元来の写本に書かれているものの脱落等であるが、特に訳名伝承の誤りが多い。[23] これら Field 版の欠陥の詳細は、一九六六年の Aquila-Index の出版[24]に先立つ P. Katz-J. Ziegler の論文[25]で詳しく報告されている。

(ウ) そこで Field 版は、量的には詩篇等のようにかなり増加したものを別にすると、エレミヤ書やエゼキエル書のように、ほとんど又は完全に変化していないものが大半であると考えて良い。質的には、シロ・ヘクサプラからのギリシア語本文再構成の部分では、その通りの読み方を伝える写本が発見されたりする程であり、なお高い評価を保ち得るものの、特に訳名伝承では誤りが多く、注意が必要であると結論できるであろう。

それ故 Field 版に基づいたヘクサプラ各欄の残存率となると信頼できないが、何訳と問うことなく、ヘクサプラ断片全体としては、一体どれ程マソラ本文と対応し得るのかという残存率なら、Field 版に基づいても十分に算出できるのであり、少なくともマソラ本文のそれだけの部分ではヘクサプラ断片があるという事を示せるはずである。

四、ヘクサプラ断片の残存率

A 算出規準

$\mathfrak{o}$ にはヘブライ語本文に無い部分（僅か）があるが、それは省略し、ヘブライ語との対応関係があるもののみを数える。ヘブライ語は文字通りの語数によってではなく、綴りとして一纏まりで書かれたものを一単位と考える。このような方法でマソラ本文を分析したものが THAT に引用掲載されている。[26] この規準によって Field 版に示されたヘブライ語の表題を重複なく計算して行き比較する。

B 結果

書名に続く数字は、Kittel の Biblia Hebraica³ · Field · % の順。(H)はヘブライ語の部分、(A)はアラム語の部分[27]である。

Gn	20613	2061	9.99
(H)	20611	2059	9.98
(A)	2	2	100.00
Ex	16712	2331	13.94
Lv	11950	1602	13.40
Nu	16413	1435	8.74
Dt	14294	1990	13.92
Jos	10051	2751	27.37
Jdg	9884	2585	26.15
1Sm	13264	2667	20.10
2Sm	11036	1944	17.61
1Kgs	13140	3077	23.41
2Kgs	12280	1922	15.65
Is	16930	5393	31.85
Jr	21834	8278	37.91
(H)	21819	8277	37.93
(A)	15	1	6.66
Eze	18731	4926	26.29
Ho	2383	660	27.69
Jl	957	109	11.38
Am	2042	364	17.82
Ob	291	43	14.77
Jon	688	91	13.22
Mic	1396	364	26.07
Na	558	81	14.51
Hab[28]	671	332	49.47
Zph	767	97	12.64
Hg	600	34	5.66
Zch	3128	403	12.88
Mal	876	123	14.04
Ps	19531	8424	43.13
Job	8343	3678	44.08
Pr	6915	2938	42.48
Ru	1294	103	7.95
Song	1250	442	35.36
Ec	2987	1226	41.04
Lm	1542	450	29.18
Est	3045	1149	37.73
Dn[29]	5923	947	15.98
(H)	2324	428	18.41

(A)	3599	519	14.42
Ezr	3753	465	12.39
(H)	2541	259	10.19
(A)	1212	206	16.99
Ne	5313	975	18.35
1Chr	10744	1218	11.33
2Chr	13312	1302	9.78
TOTAL	305441	68980	22.58
(H)	300613	68252	22.70
(A)	4828	728	15.07

これを整理すると、次のようになる。

Gn–Dt	79982	9419	11.77
Jos–2Kgs	69655	14946	21.45
Is–Mal	71837	21297	29.64
(Ho–Mal	14357	2701	18.81)
Ps–2Chr	83952	23317	27.77
(Ru–Est	10118	3370	33.30)

従って、クムラン断片は平均して旧約聖書本文の二割強存在するが、五書の部分ではあまり残っておらず、イザヤ書以下の後半部で三割弱残っているということになる。[30] 特に、詩篇、ヨブ記、箴言、伝道の書等では四割を越える量が残っており、この方面における諸研究にとって、クムランは無視し得ない重要なものである事を示している。

最後に参考として絶対数の一番多い「詩篇」を例にして、その内訳（上述の如く正確なものではない）を示して本稿を閉じることにする。数字は、残存数・詩篇の残存数8424に対する％の順である。[31]

ἐβρ	123	1.46
α′	4573	54.28
σ′	6786	80.56
ο′	8393	99.63
θ′	1373	16.29
ε′	830	9.85
s′	404	4.79
ζ′	3	0.03
ἄλλος＋ἕτερος＋ἑτέρα ἔκδοσις	549	6.51
ἄλλοι＋ἄλλοι πάντες	31	0.36
ὁ Ἑβραῖος＋τὸ Ἑβραικόν＋ἑβραικὴ λέξις	29	0.34
ὁ Σύρος	11	0.13

註

(1) ヘクサプラに関する一般的知識については各種の聖書辞典及び旧約聖書緒論の当該項目の他、詳しくは次のような文献を参照。

C. Taylor, The Hexapla, in: W. Smith–H. Wace (ed.), A Dictionary of Christian Biography, 4 vols (London 1877–87)., vol. 3, 14–23.

A. Harnack, Geschichte der altchristlichen Literatur bis Eusebius, Teil I (1893 : Leipzig 1958[2]), 339–343.

H.B. Swete, An Introduction to the Old Testament in Greek, Cambridge, 1902[2]; revised by R.R. Ottley 1914. Reprint of the revised edition, New York, 1968.

E. Nestle, Die alexandrinische Übersetzung des Alten Testaments, in: PRE[3], vol. 3, 2–24 and Nachträge, in: vol. 23, 207–210.

——, Syrische Bibelübersetzungen, in:PRE[3], vol.3, 167–178 and Nachträge, in: vol. 23, 224–226.

F. Kenyon, Our Bible and the Ancient Manuscripts, London, 1958, especially Chapter 5 : The ancient versions of the OT.

B. J. Roberts, The Old Testament Text and Versions, Cardiff, 1951.

P..E. Kahle, The Cairo Geniza, Oxford, 1959[2].

S. Jellicoe, The Septuagint and Modern Study, Oxford, 1968.

E. Würthwein, Der Text des AltenTestaments, Stuttgart, 1973[4], especially Chapter 5 : Die Septuaginta.

S. P. Brock, Die Übersetzungen des Alten Testaments ins Griechische, in : TRE, vol. 5 (1980), 163–172.

——, Syrohexapla, in : TRE, vol. 5 (1980), 185–187.

また本稿中しばしば次の文献を用いる。

SEPTUAGINTA. Vetus Testamentum Graecum Auctoritate Academiae Litterarum (*sive* Scientiarum) Gottingensis editum, Göttingen, 1931ff.

ケンニコットの版として引用。

E. Hatch-H. A. Redpath, A Concordance to the Septuagint and the other Greek Versions of the Old Testament, 2vols. (Oxford 1897) and a Supplement (Oxford 1906); Reprint, Graz, 1975.

Frederick Field, Origenis Hexaplorum quae supersunt sive Veterum Interpretum Graecorum in totum Vetus Testamentum Fragmenta, 2 vols., Oxford, 1875; Reprint,

Hildesheim, 1964.

(2) o′本文は、オリゲネスが手にしたセプトゥアギンタ本文とヘブライ語本文とを互に比較して、ヘブライ語本文にあってギリシア語本文が無い部分では、他のギリシア訳(主に θ′)を補うことによって出来上ったものであり、その点で従来のセプトゥアギンタ本文とは異なったものになった。セプトゥアギンタの校訂本には、ヒエロニムスの証言 (Praef. in Lib. Paralip., PL XXVIII, 1324f.) によれば、この他にルキアノス *Λουκιανός* とシニキオス *Ἡσύχιος* の校訂本があった事が知られている。後者が如何なる人物かは良く分らないが、前者は Eusebius, Hist. Eccl. VIII, 13; IX, 6 の他、サモサタのパウロスと関連して幾らかの事が知られている。Cf. F. Loofs, Paulus von Samosata (TU 44,5), Berlin, 1924, 183–6 et al.

(3) Swete (op. cit.) は、一三〇年より後に始まり、一四〇年ないし一四五年までに完成していたとし、Jellicoe (op.cit.) は、一三〇年頃から一四五年の間に、Würthwein (op. cit.). は、一三〇年から一四〇年にかけて成立したと考える。

(4) Hist. Eccl. VI, 16f.

(5) Comment. in ep. ad Titum 3, 9 (PL XXVI, 734f.); Commentarioli in Psalmos (G. Morin, Anecdota Maredsolana III=Reprint CCL LXXII, p.180, l.46f. and p. 195, l.27–31). 前者は三八七〜三八九年の間に、後者は三九三年より前に成立した。更に、J. N. D. Kelly, Jerome —— His Life, Writings and Controversies——, London, 1975. Chapter 13 (The Monasteries at Bethlehem) and Chpter 15 (From Septuagint to Hebrew Verity) 参照。

(6) 六世紀より新しいものではないパウロ書簡の写本 H (Paris, Bibl. Nat., Coislin 202) の次のような署名から、その事が知られる。*Ἀντεβλήθη δὲ ἡ βίβλος πρὸς τὸ ἐν Καισαρείᾳ ἀντίγραφον τῆς βιβλιοθήκης τοῦ ἁγίου Παμφίλου χειρὶ γεγραμμένον αὐτοῦ*. Cf. Field, op. cit., Prolegomena, xcix.

(7) C. Taylor, Hebrew-Greek Cairo Genisa Palimpsests from Taylor-Schechter Collection, Cambridge, 1900. 写本の数字は、A. Rahlfs, Verzeichnis der griechischen Handschriften des ATs (MSU 2), Berlin, 1914 による。以下同様。ゲニザでの発見については、Kahle, op. cit., 3–13 参照。

(8) この写本は、十三〜十四世紀にダマスコのヨハネの著作 *Ὀκτώηχος* を写すために消された重記写本から出て来たもので、羊皮紙56枚に13組の断片が確認された。この写本の構成は、二部からなり、まずクサラ第二欄から第六欄が示され、それに対するカテナが続く。即ち、表題としてルキアノ

ス系のセプトゥアジンタ本文がまず来、それにカテナ本文が続くという風になっている。カテナの部分は、そして重要ではない。一四二節分の内訳は次の通り（篇数はセプトゥアジンタのもの）であるが、多少の欠落のある欄もある。Ps 17: 26b–48; 27: 6–9; 28: 1–3; 29; 30: 1–10, 20–25; 31: 6b–11; 34: 1–2, 13–28; 35: 1–6; 45; 48: 1–15; 88: 26–53.）この写本全体の公刊は遅かったが（G.Mercati, Psalterii Hexapli Reliquiae. Pars Prima: Codex Rescriptus Bybliothecae Ambrosianae O 39 sup. phototypice expressus et transcriptus, Vatican City, 1958）、その内容は不十分な形ではあるが、発見者の資料提供に基づき、Hatch-Redpath の Supplement, III Additional Words and Occurences of Words in Hexaplaric Fragments 中に他の断片と共に収められている。五欄に配置された、この写本の見本は、発見者自身の論文 D'un palimpsesto Abmrosiano contenente i salmi esapli (Atti della Accademia Reale della Scienze di Torino 31, 1896, 655–676) に続く二論文、A. M. Ceriani, Frammenti esaplari palinsesti dei salmi nel testo original scoperti dal dott. ab. G. Mercati (Rendicoti del Reale Instituto Lomdardo di Scienze e Lettere, II–29, 1896, 406–8) と E. Klostermann, Die Mailänder Fragmente der Hexapla (ZAW 16, 1896, 334–7) によって、まず見ることができるが、更に Swete, op. cit., 62f.; Würthwein, op. cit., 186f.; P. Nautin, Origène ——Sa vie et son œuvre——, Paris, 1977, 304 等によっても、又第二欄だけなら、その一部は R. Meyer, Hebräisches Textbuch, Berlin, 1960, 68–71 で見ることができる。Cf. Jellicoe, op. cit., 130–133; J. W. Wevers, Septuaginta Forschungen seit 1954, Theologische Rundschau NF 33 (1968), 62–66.

(9) 例えば、写本Oは、十二預言書の部分では、本文はアレクサンドリア形で、欄外注はクルサラテス系であるが、エゼキエル書になると、本文はクルサラテス系（即ち o′）であるが、欄外注はルキアノス系である。Cf. J. Ziegler (ed.), Duodecim Prophetae (ゲッティンゲン版 vol. 13), Göttingen, 1943, 1967², 43f.,53ff.; Ezechiel (同vol. 16/1), Göttingen, 1952, 1977², 32ff., 47.

(10) Mercati は、この二つのカテナに含まれるクルサラテス断片を、彼の Psalterii Hexapli Reliquiae の第二部として出版する計画であった (of. op. cit., ix–x) が、一九五七年に死亡したため果たせなかった。前者は、すでに Field が彼の補遺 Auctarium ad Origenis Hexapla で用いていたが、誤りが多い。後者は、最近ようやく出版された。Adrian Schen-

ker, Hexaplarische Psalmenbruchstücke——Die hexaplarischen Psalmenfragmente der Handschriften Vaticanus graecus 752 und Canonicianus graecus 62—— (Orbis Biblicus et Orientalis 8), Freiburg, 1975.

(11) Veterum Interpretum Graecorum in totum V. T. Fragmenta, collecta, versa et notis illustrata a Johanne Drusio, Linguae Sanctae in illu strium Frisiae Ordinum Academia, dum viveret, Professore, Arnheim, 1622.

(12) Vetus Testamentum ex versione LXX interpretum secundum exemplar Vaticanum Romae editum, una cum Scholis ejusdem editioni, variis MSS. codicum veterumque exemplarium lectionibus, necnon Fragmentis versionum Aquilae, Symmachi et Theodotionis, Franecker, 1709.

(13) 一九五二年発見。α'' σ'' θ' と同じ読み方を多く持つ。D. Barthélemy, Les devanciers d' Aquila (VTS 10), Leiden, 1963 によって公刊された。Cf. ThR NF 33 (1968), 66-76。

(14) De mensuris et ponderibus, especially 15-19.

(15) 1098 の第六欄は予想されるように θ' ではなく ε' である。

(16) Cf. J. Halévy, L' origine de la transcription du texte hébreu en caractères grecs dans les Hexaples d'Origène, JA 9 (1901), 335-41 ; H. M.Orlinsky, The Columnar Order of the Hexapla, JQR N. S. 27 (1936-7), 137-49 ; W. E.Staples, The Second Column of Origen' s Hexapla, JAOS 59 (1939), 71-80 ; G. Mercati, Il problema della colonna II dell'Esaplo, Biblica 28 (1947), 1-30, 173-215 ; J. A. Emerton, The Purpose of the Second Column of the Hexapla, JTS N. S.7 (1956), 79-87 ; M. L. Margolis, The Pronunciation of the Sh^{e}wa according to new Hexaplaric material, AJSL 26 (1909-10), 62-70 ; E. A. Speiser, The pronunciation of Hebrew according to the transliterations in the Hexapla, JQR N.S. 16 (1925-6), 343-82, 23 (1932-3), 233-65, 24 (1933-4), 9-46 ; O.Pretzl, Die Aussprache des Hebräischen nach der zweiten Kolumne der Hexapla des Origenes, BZ 20 (1932), 4-22 ; E. Brønno, Studien über hebräische Morphologie und Vokalismus auf Grundlage der Mercatischen Fragmente der zweiten Kolumne der Hexapla des Origenes (AKM 28), 1943, reprint Nendeln (Liechtenstein) ; O. Eissfeldt, Zur textkritischen Auswertung der Mercatischen Hexapla-Fragmente, WO 1 (1947-52), 93-97 ; R. Hanhart, Jüdische Tradition und christliche Interpretion——Zur Geschichte

der Septuagintaforschung in Göttingen——, in: „Kerygma und Logos" (Festschrift für C. Andressen), Göttingen, 1979, 280–97等。

(17) 1 Kgs 21 (M20), 9–17 ; 2 Kgs 23, 12–27. Cf. F. C. Burkitt, Fragments of the Books of Kings according to the translation of Aquila, 1897.

(18) Ps 89 (M90), 17 ; 90 ; 91, 1–10 ; 95, 7–13 ; 96 ; 97, 3 ; 101, 16–29 ; 102, 1–13. Cf. C. F. Taylor, Hebrew-Greek Cairo Genizah Palimpsests, 1900. σ′ についてもクムラン伝承にとらえられているのが、ほんのわずかある。(Van Haelst No. 34, 167)。

(19) Hatch-Redpach, Supplement-III は一九〇六年前に発見された断片の語彙を網羅している。

(20) Cf. GCS のエウセビオス全集 9 (J. Ziegler, 1975), XVIII–XXII.

(21) Cf. M. H. Goshen-Gottstein, Eine Cambridger Syrohexapla-handschrift, Muséon 67 (1954), 291–6; Neue Syrohexaplafragmente, Biblica 37 (1956), 162–83 ; W. Baars, New Syro-Hexaplaric Texts, Leiden, 1968 等。

(22) ゲッティンゲン版 Isaias (vol. 14, ed. J. Ziegler 1939), 5.

(23) ゲッティンゲン版 Jeremias, Baruch, Threni, Epistula Jeremiae (vol. 15, ed. J. Ziegler 1957, 1976²), 98ff.

(24) J. Reider-N.Turner, An Index to Aquila (VTS 12), Leiden, 1966.

(25) Ein Aquila-Index in Vorbereitung, VT 8 (1958),264–85.

(26) E. Jenni-C. Westermann (ed.), Theologisches Handwörterbuch zum Alten Testament II, München/Zürich, 1976, 539 f.

(27) アラム語の部分は、Gn 31, 47 ; Jr 10, 11 ; Dn 2, 4 b—7, 28 ; Ezr 4, 8—6, 18 ; 7, 12—26 である。

(28) くくらく書第三章には、その由来不明の伝承があり、Field 版は ἄλλος として、これを収めているが、ゲッティンゲン版では、ルキアノス系の本文としている。Cf. J. Ziegler, Duodecim Prophetae (op. cit.), 137 f.

(29) ダニエル書のギリシア語本文には種々の問題があるが、Field 版はクムラン断片として確実に伝承されているものを収めたのである。Cf. Field, II, 903–7 ; J. A. Montgomery, The Hexaplaric Strata in the Greek Texts of Daniel, JBL 44 (1925), 289–302 ; The Book of Daniel (ICC), 1927, 24–57 ; K.Koch, Das Buch Daniel, Darmstadt, 1980, 17–29.

(30) 旧約聖書の前半部で少ないという事は、同じ部分でのシ

ロ・ヘクサプラの少なさと密接な関係があると考えられる。

(31) ὁ Ἑβραῖος, τὸ ἑβραϊκόν, ὁ Σύρος 等は、その名で伝わっている翻訳である。詳細については、Field, Prolegomena, LXXI-LXXXII を参照。